（第３種郵便物認可）

たんぽぽ咲いた ③
伊佐市の挑戦

確かな成長を実感

「手をつなぐ」母の願いかなう

手をつないで歩く親子がうらやましかった。

松下麻里さん(38)の長男伶偉(れい)ちゃん(4)は、生後8か月で歩き始めた。だが、目を離すとすぐにいなくなり、オムツ姿のまま道路に出ていたこともあった。「手をつなごう」と呼びかけても、一瞬、手に触れただけでいつも走り去った。

1歳で通い始めた保育園で、「みんなから離れて1人でいる」「目を見て話さない」と指摘された。「うちの子がおかしいって言うの」と食ってかかった。心を閉ざすことで、不安を押し殺した。

昨年3月、保育園の勧めで、たんぽぽのスーパーバイザー大迫より子さん(58)と面談した。「このままだと、この子は人とかかわれなくなるわよ」。その一言で、たんぽぽに通うことを決意した。

＊

「興味がなければ長続きしない子どもだった」。たんぽぽスタッフの冨永雅代さん(37)は、入園した頃の伶偉ちゃんを振り返る。絵本を読み始めても、すぐにトイレに逃げ込んだ。

冨永さんたちは園内でクッキー作りを企画した。ほかの子どもたちより先に、伶偉ちゃんのクッキーを焼き始めた。「いい匂いだね」と声をかけ、興味を抱かせる。焼きたてを口にした伶偉ちゃんは「おいしい」と声を弾ませた。

雨上がりの帰り道。お母さんと手をつなぐ伶偉ちゃんの足取りははずんでいた

再びクッキーを焼き始めると、オーブンの前でじっと焼き上がりを待つことができた。「ただ『待つ』のではなく、待った結果が分かれば、きちんと待つことはできるようになる」と冨永さんは狙いを明かす。「待つ楽しみ」を体験させる療育だ。

最近、伶偉ちゃんがスタッフを驚かせた。「ムズムズしちゃうけど、今は座ってなきゃいけないから」。小さなお尻を揺らしながら頑張る伶偉ちゃんがいた。

＊

「はいっ」

伶偉ちゃんがすっと右手を差し出した。松下さんは左手で優しく包み込む。確かな成長が小さな手から伝わってきた。2人は弾むような足取りで、たんぽぽへ向かった。